断酒
みどりの友

発行所　呉みどり断酒会
事務局
呉市押込5-12-25
渡部　憲方
郵便番号　737－0915
電　話　33－5571
発行人　渡部　憲
編集代表　曽根　敏浩
印　刷　松広印刷㈱

第40回　広島県断酒大会（黒瀬）

アルコール専門病院

副会長　西村好登

五十才いつの日か酒にのまれていく自分が情けなくなって、気がつくと、呉みどりヶ丘病院の三病棟の治療部屋にいて誰にも手がつけられない状態になり、普通の病院に見放された。三度目の入院までは、何とか社会の中で生活が出来たが世間に対して甘えがあった。**ちょっと一杯だけと甘い考え方が酒地獄に落ちていった。**

何十年もかけて自分を育ててくれた会社の社長に対しても最後は、裏切りのかたちになってしまった。その事は今でも悔やんでいる。自分は仕事が出来る、まかされているそんな考えが間違っていた。断酒会で酒を止め続けていると本当に井の中のかわずであって仕事をとると只のアル中でしかなかった。

子供が幼稚園に入園する前日に幻聴、幻覚が出て三十才の時に初めて、おふくろにつれられて呉みどりヶ丘病院に入院。厳しい入院生活をへて又社会復帰させて貰って当時景気も良かって仕事に没頭して二十年、今度は身体も頭もボロボロになって五十才で再入院、今度は酒から逃げる事が出来なくなった。今振り返ると〝ブラックアウト〟ぎみな状態で**女房の頭を焼酎のビンがこなごなになるほど殴ってしまったり**、本当に今考えると怖くなる暴言、暴力はひどかった。とにかく頭の中は〝酒〟の事ばかり。身体に酒入れんと生きていかれん。もちろん、それまでに飲酒運転での大事故どれだけ身内と社会に酒害をまきちらしても飲酒時は呉みどりヶ丘病院は嫌な所であったが、こうして酒を断酒会の中で止め続ける事で、リハビリセンターでの土曜例会、呉みどりヶ丘病院**院長先生の所感を聞く事が出来て改めてここが心の原点、反省させて頂く神聖な場所と思える**様になった。飲んでる時は酒の無い幸福な心はわからんけれど、現在酒止め続ける人だけが知る喜びだと思う。

例会出席あっての一日断酒

第40回　広島県断酒大会

梅雨入り宣言がだされた六月十三日、第四十回広島県断酒大会がテーマ「生かされて　生きる」と題して、東広島市にあります、黒瀬文化センター「せせらぎホール」に於いて、四百四十五名の多数の参加者を集めて盛大に開催されました。

当会からは会員、家族合わせて五十六名が参加しました。

総合司会は当会副会長の西村好登氏が努め、当会の堂脇正美、堂脇恵美子親子の断酒祈念で大会は始まりました。

司会：西村　好登

断酒祈念：堂脇親子

午後からは当会の常任相談役である田中正直氏による「特別体験談」、鍋山秀一氏の「体験発表」を行いました。

記念講演は、呉みどりヶ丘病院院長　長尾澄雄先生による演題「アルコール依存症からの脱却」を頂きました。

最後に来年の第四十一回広島県断酒大会を庄原で開催することのアピールを行い盛況のうちに閉会となりました。

特別体験談

常任相談役
田中正直

みなさん、こんにちは、呉みどり断酒会の田中正直と申します。

この四十回の記念する大会において、四月の中旬じゃったろうと思うんですが、県連の会長中田氏より『田中さん、あんた四十回の記念すべき大会じゃけ、体験談を語れ』と申されました。この天邪鬼は『冗談じゃないわい、後期高齢者に入ったもんが出る幕じゃない』と言って言葉では『ノー、ノー』と言いきったんですが、彼曰く、『**あんた、断酒会で協力を仰せつかったときには絶対断るな。そう言ってわしに教えたのは誰ですか。あんたでしょうが**』まあ二の句がつげず、何にも理由づける事ができなくなり、しばらく黙ってそのまま別れたんですが、後日、『もう組んだけえ』ということで、まあ、拙い私の体験談になろうかと思いますが、飯を食うた後で眠とうなったらどうぞ、ここから見えませんので暗うて、お休みいただけたらと思います。

体験談と申しましても、自分の人生史になるかと思いますが、私が幼少の頃、皆さんびっくりされるんじゃないかと思うんですが、私の住んでいる村では、この子は神童じゃなかろうかと言って、周囲から『末は博士か大臣でぇ。』と言って、未来を嘱望されておりました。片田舎と申しましたのは、私が小さい頃はまだ住んでいる所が、賀茂郡広村字長浜村という所でございまして、半農半漁の口の悪い漁師さんが多くて、自分もそうゆうふうに育って参りました。小学校へ入学する頃には呉市に編入されて呉市立長浜小学校というようなふうになっておりましたが、小学校に入学しましても、三クラスで百三十名位の同じ学年の中で、成績は常にトップを維持しておりました。

それが、忘れもしませんが、昭和二十年の春、小学校五年生になる時に呉の空も敵機の空襲で、戦争が第二次世界大戦が厳しくなって参っておる時に、ちょうど縁故

疎開をする人、親戚のある人が田舎へ疎開する。僕は、学童集団疎開というのがありまして、親に頼みこんで、多分泣いて頼んだんじゃろうと思うんですが、自分が率先してその学童集団疎開へ行かせてもらいました。

「餓鬼道へ」

軍人教育で洗脳されていた、すでに私自身は『一人でも残って鬼畜米英と闘うんじゃ』という、竹槍のようなあの時代でしたので、勇んで広島県のとある田舎村へ集団疎開しましたが、あにはからんや、田舎村とはいえど、学童集団疎開には食料難は厳しく、いつも腹を空かして苦しんでおりましたが、この餓鬼道に陥ったのが疎開しておった当時でございます。

『貧すれば鈍する』ということわざがありますが、そのひもじさに耐え克つことさえできず、悪仲間と言いますか、夜になると、学校から帰りに昼に調べておった村の畑へこっそりと寺の本堂から二、三人で抜け出して、ありとあらゆる野菜と言いますか、当時を思い出すと、トマトが一番おいしかったのぅという思いがするんですが、まあ、食い荒らしてそれでなんとかひもじさをしのいでおったように思います。

当時、朝になると、もう、すぐ村の人から訴えがある、『昨夜やったんは誰かぁ？』三人が黙って先生のところに謝りに出る。御存じの方もあろうかと思いますが、木刀で半ズボンの尻を一発づつ直心棒と申して何回も叩かれました。その罰として叩かれても、ひもじさには克てず、やっぱり毎晩のように、そういう盗みをしておりました。

思えばその時から、餓鬼道に陥ったんでしょうし、また己が、人の物を盗むという事に目覚めたというたらおかしいんですが、やるようになっておりました。

当時、直心棒でケツを一発づつ殴られるんですが、毎日のようにやられるんで、尻は青あざだらけに、ずっと消える事がありませんでした。

まあ、泣き泣きの疎開生活でしたが、やがて昭和二十年の八月十五日、世界大戦の敗戦に何故か記憶に残っておるのが、正午に学校の校庭のグラウンドに正座して、天皇陛下の敗戦の玉音放送を聞いた、一人ではなしに周囲の者も、だったろうと思うんですが、『負けたんじゃー！』という思いの中で、涙がこぼれておりました。

そんな寂しい事だけじゃなしに、それから入ってくる、民主主義、自由主義、そういうものに、実際には、本質、民主主義に責任が伴うことさえ知らず、『自由なんじゃ、何をしてもええんじゃ！』という思いで、中で、『せにゃあ損じゃ。』というようなものを、終戦後当時、やって参りました。

飛ばしますが、やがて中学へ入りまして、まだ優等生の部へ入っとったんですが、二年生の時に父親が呉市の市議会議員の立候補に伴う準備運動と言いますか、支援される、応援される人が毎晩のように来て、二階の奥の座敷で酒を酌み交わしながら、票読みというか、作戦を練っておられました。必ずと言っていいほど、薬缶に印をつけてお酒を運ぶほどでした。私もある日、その手伝いをして、そこの部屋に行った時、ある支援者の人が、『若も一杯飲んでみいや。』、それで湯呑みに酒をついでくれました。興味本位にぐっと飲んだ時に、何と口ざわりのええ『これが酒というもんか。』という思いの中で、しばらく経つと何ともいえん酔い心地と言うんですか、ホロ酔いが回ってきた。その酔いの心地よさが忘れられずに、それから、期間中、毎晩のようにそのおじさん等の部屋へ行って、隠れ酒と言いますか、そこでは（おおっぴらに）飲めるんでコップ一杯飲んでいたように思います。

「大学受験に失敗」

中学での思い出は、酒の味を覚えた事だけですが、やがてそうした悪い癖を持った少年は、高等学校へ行くや否や、不良仲間と一緒に、喫煙はするわ隠れ酒はするわ、当時まだ、学生の身分ですが、遊郭へも遊びに行っておりました。全く隠れ不良学生で、ばんカラぶっておりましたが、当然、高校卒業する年、大学受験は、今から思えばというか、大人になって当然失敗するのがあたりまえじゃったと思います。ただ虚栄心の強い見栄っ張りなこの男は、高等学校の担任の先生と親父が進める広大はどうしても行きたくなく、親父には内緒で担任の先生を説き伏せて、東京のある大学へ受験を、当時内申書がありましたので、もちろん旅費は親戚の銀行に勤めていた義

姉に、借りて、広大の受験日の二日前に広駅を一人こっそりと家出の如く、上京致しました。

二日前に、広から東京に行かなきゃ、三日後の受験に間に合わない、そういう思いで行ったんですが、もちろん寄宿するところは、一級先輩の、大学の名は伏せますが、その人のところにもぐり込んで、当然二日目に、ある学科で失敗して、もうだめじゃということは、わかっとったんですが、まあ金の続く限りは、と思いながら、金が無くなる。仕方なしに、呉の地へ帰って参りました。

当時まだ、浪人生活で学校みたいなものは無かったんで、家で一ヵ月もぷらぷらしておると、もう家の中で、窮屈で窮屈で、たまらんで、友人の母親が世話してくれる事があって、アルバイトのつもりで広大へ勤めるはめになりました。

そうすると、勤め始めると、一か月たった時にポンと給料をくれる、本俸、公務員で六千四百円じゃったと思うんですが、まあ、うれしいこと、うれしいこと、飲む口持ってるもんですから、すぐその給料を持って、飲み屋へ走り込む。以来、身分不相応な贅の限りを尽くして参りました。

何年遊び呆けたかわからんのですが、まあ、四、五年だったかのぅと思うんですが、広島、呉のバーじゃ、キャバレーじゃ、飲み屋に借金だらけで身動きが取れず、そのツケを取りに来る、奴らの怖さと言うんですか、とうとう、いたたまれず、まあ、夜逃げ同然、当時の心境どうなんかのぅ、わしが呉におりさえせにゃ、借金は払わんでもええ、というような思いで、家出しました。

「家出、放浪生活へ」

二十四歳の時ですが、大阪へ飛び立ったのはいいんですが、金もろくに持たず、翌日、梅田の駅で、手配師に拾われて、土方、人夫の飯場へ行って過ごしました。まあ、土方をしておれば、なんとか焼酎だけは二合瓶が飲める、その安易な考えで、過ごしましたが、しばらくすると、人がとやかく言う、管理されるのが嫌いなんで、一番手っ取り早いのが、西成の釜が崎で立ちんぼ生活に入りました。

立ちんぼう生活をすると日当がええんで、ただ雨が降ったら、とてもじゃない、その日の金を持っておりませんので、月に二回位、自分で血を売りに行く。血液銀行というのがあったんですが、そこへとぼとぼ歩いて行って、当時、日当の一日半分位で四〇〇ｃｃが売れました。

そういう生活をやりながら、人様を騙し、人様の物を盗んで、道頓堀のほうも結局、朝早うから金を拾いに歩き回った。そうゆう生活をやりながらも、思えば何の抵抗感もない、自分に成り下がっておりました。熊野さん流に言えば、ほんまに最低の奴でした。四年ほど、そういう放浪生活を続けましたが、何故かふるさとの呉へ帰ってきた。

酒をやめて後から、自分で考えてみたんですが、当時はわかりませんでしたが、なぜ帰ったのか。あれは犯罪者が持つ、郷愁の、ふるさとの、ああゆう心理があるんじゃないんかのぉいう、もちろん心の中の、両親に対する、甘えの大きな根源が自分にあった事は否めませんのですが、そのものがあったから、呉へ帰れたんかのぉ、あるいは先祖の目に見えん糸で呉へ帰らされたんかのぉ、という思いがしております。

ところが、呉へ帰ったからといって、親元で真面目になるんかというと、結婚をさせてくれましたが、やっぱり、遊興にふける、結婚した家内はどげえな気持ちだったんじゃろかと思います。

「長尾先生との縁」

まあ、運良く、ほんまに運良く、三十九歳を前にして長尾院長先生との出会いをいただきまして、なんかあの時は上手言われたんかのぉ、ちょっと休憩しようかというような気持ちで、入院、治療に入った訳ですが、私が気付いた時は、ある職員さんから聞いたら、『田中、お前、今日気付いたの入院して三日目でぇ。』と、まさにそうじゃっ

たろう思います。

両手、両足はベッドにロープでくくり付けられ、おしめはしてある。そういう、己の禁断症状のひどかった事、そういうものを、酒をやめて初めて、そういう事の、ひどい己であった、自分であったという事にどうしようもない己じゃったという思いが、しております。

それが先生に命を助けてもろうて、数か月にして断酒会に導いて頂いたんですが、何の気なしに断酒会の例会に出ておっても、心の中ではいつも、『あんな事を言うてさっき威張り上げてああしたこうした言うて武勇伝かぶって、なんで酒がやめられりゃあ』という反発ばっかり内面でしておりました。

当然そういう心の中のむしゃくしゃが、反発ですから、やがて半年ほど酒が止まっておったときに、ふと、自分を考えた時に、『わしゃあやっぱ、大丈夫じゃ、先輩のみんなとは違う、わしには不思議な力があるんじゃ』そういうような思い上がった、当時は思いあがっておりませんでしたが、それが当然と思うて、断酒会のある面では異端児と批判をしておりましたが、今から考えてみたら、そのすぐ、再飲酒に走りました。

そうした半年近くのやめておった期間とはいえ、その間に、たった半年前、一年前のあの飲酒地獄じゃって、院長先生に命を助けてもろうて、今度は辞めるぞ言うて、あの飲酒地獄の事は、とうに忘れて、若い時に酒が自分にとってまだまだ嗜好品の時代じゃった時に、その前の前まで、己の考え方がかっておりました。

当然、もういっぺん、『わしは半年もやめとるんじゃけ、あの位の事はできるじゃろう。』という、できるいう、自分に一生懸命に言い聞かせながら、やったのが、再飲酒の始まりです。

爾来数日は、なんとか耐えておったんですが、心の中はもう泣きの涙で、『なんとかせんにゃいけん、なんとかせんにゃいけんと、わしともあろうもんが。』という涙を流しながら、飲む酒でした。結果としては、家内に、『先生に電話して、もういっぺん助けてもろうてくれ。』それだけを言うたのは覚えておるんですが、再入院させていただきました。

「心の安まる場」

それから退院の時に、院長が『執行猶予みたいなもんじゃけぇのぉ、正直』と言われた事は、かすかに頭の中に残っておるのと同時に、『とにかく何が何でも酒だけはやめんにゃ、どうにもならんわいと言うんで、例会に出て、酒やめちょる人がおるんじゃ、ついて行こうかい。』ただ、当時を振り返って思いましたが、断酒会の例会の場、あの時間だけが、本当は自分が一番、心が安まっちょる、安める時間の場であったように思います。

あの例会場に行った時だけが、社会の白い目も、家族の白い目も、文句も言われずに同じ仲間として迎えてくれて、話し合える、本当に心が安まる場じゃったんじゃないかという思いがしておるんですが、とは言え、断酒会はええ事ばっかりじゃなしに、まあ、心ない先輩の陰口が耳に入ってきました。

『あいつ、田中は、今度はいつやるかのぉ。二度ある事は三度あるけんのぉ。今度はちぃと短かぁでぇ。』というような、陰口のようなものが耳に入ってきた時に、心の中で何を思ったかというたら、『何くそ、何くそ』と、心の中でその雄叫びのように叫び、『死んでも、飲まんぞ。』という思いの中で、例会に出続けながら、当初、飲まん事だけを、必死に考えて参りました。

やがて、二年かなんぼか過ぎた時に、己の断酒の継続のメリットが出ませんので、『なんぼしてもだめか』と思って、振り返りよったら、自分の飲酒時代に、でたらめをしやぁげて、どうにもならん罪の大きさ、深さ言うんですか、そのものがわかりかけた時に、本当に戦きました。

『わしゃ、これ酒やめても、だめでぇ、どうせ将来無ぁでぇ』と思うて、余りにも犯してきた罪の深さ、投げやりな気持ちになった時、運が良い男は、院長先生に、その事を愚痴った時、『お前、それだけ過去が、よう正しゅう見えるようになったんじゃないか。人間らしい気持ちになれたという事じゃろうが』なんか、ものすごく、こう勇気づけられて、あの先生の一言、二言が、神がかり的なもんじゃろうと思うんですが、先生に言われた事で、『よーし、とにかくやるぞ』と『理屈抜きで続ければ、何とかなるわい。』

そういう思いで一生懸命、必死

で、断酒会の例会に出させて頂きましたら、先輩が、ある時に、『田中、お前これこれこういうのを手伝え』という事の中で、一生懸命、確実にこなすことによって、この天邪鬼が、そのことをやる事で、愚痴さえ感じんようになって、一生懸命、その会活動に、専念させていただくことができたように思います。

院長先生の本の中に、**断酒は究極の目的ではなく、『あくまで、人として生きる、生活の手段である』**という事を書かれておりましたが、入会当初はその事がどうしてもわからず、悩んだもんですが、やっぱり、断酒例会に出続けながら、断酒を続けさせている、頂いておる。いつ頃であったか、『ははあー、先生が言うてたのは、こういうもんなんかあー。』というような、まだわかっておりませんが、真意のようなものが、うなずける思いがありました。

今、自分にとって、自問自答しておりますが、『人の、人間の、己の価値観というて何やろうか、断酒を何十年したと言って、そんなもんじゃないし、社会的な地位や名誉や資産があったって、何にもなりゃあせんし、そんなもんじゃない、もっともっと、先生のおっしゃる、人としてどう生きておるか。という事に、そのものに価値観を見い出すべきじゃあなかろうか?』そういう思いでいっぱいです。

長くなりましたが、最後に僕が常に思っておる事、**『人は古い記憶の上に新しい記憶、知恵を積み重ねて生きていくものだ。』**そういう思いでこれからもやっぱり例会に出続けながら、日々断酒を新たに、新しく、生まれ変わりつつある己が、そこに人としての成長があるということを信じて、断酒会の皆さんと共に精進して参りたいと思います。拙い体験談でございましたが、どうもご清聴ありがとうございました。

体験発表

鍋山秀一
（本人）

皆さんこんにちわ、**呉みどり断酒会の鍋山秀一と申します。**よろしくお願い致します。

私が目を覚ますと、そこはベッドの上で、点滴が三本ぶら下がっていました。

「ここはどこじゃろう?」「何でベッドに寝て、注射をしとるんじゃろう?」と思いました。ボーっとした頭で考えてみると、朝、酒を飲みながら歩いていたことを思い出しました。自分が酒を飲んで意識を失い、病院に担ぎ込まれたことが、やっと飲み込めて来ました。「しもうた。ブラックアウトに落ちたんじゃ」「ああ、飲まにゃえかった」と思っても、後の祭りでした。

私が毎日お酒を飲みだしたのは二十五歳くらいの時からです。夜眠れなくなって、つらい日が続いていたので、何か良い方法は無いだろうか、と思っていたところに寝酒という方法があることを知ったのです。

（中略）

約半年後、ほぼ自律神経失調症は直りました。私は、その半年間お酒を飲んでいませんでしたが、お酒が飲みたくたり、お酒を飲んでも良いか、精神科の先生に聞きました。先生は「一、二杯なら良いでしょう」と言ったので、またお酒を飲むようになりました。しかし、一、二杯のお酒では足りるはずもなく、「隠し酒」「隠れ酒」をするようになりました。家族の前では、少しの量のお酒を飲み、家族が見ていないときに、家の外にあるヨド物置やエアコンの室外機の裏、家の中のクローゼットの奥や天井裏などに隠してあるお酒を出して来ては、飲んでいました。

そんなことをしていて家族が気づかないはずはありません。ある日、息子が天井裏に隠しておいた焼酎のパックを見つけ、女房に

「お母さん、これ見んさい。こんなことをしょうるんよ。もうお父さんとは別れんさいや。」と言ったそうです。その頃の息子は、就職が決まらず落ち込んでいたところへ、父親の情けない姿を見て、ど

れだけ辛い思いをし、苦しんだことだろうと思うと、申し訳なくて、謝っても謝りきれない気持ちです。

数日後、精神科でアルコール依存症と診断されたので、女房は、町の保健所に相談し、断酒会を紹介してもらいました。私は訳も分からず断酒会に入会し、週に一度例会に出席するようになりました。

初めて行った例会では、皆が自分の体験談を話し、唄を歌い、手を繋いで「頑張ろう」と言っていました。私は、「何じゃここは。ここにおる人は自分とはちょっと違うんじゃないか」と思いました。また「酒を一生止めるなんかできるかい」「まあ今はちょっとお酒を休んで、ほとぼりが冷めたら上手に飲みゃあええわ」と言う考えしか浮かびませんでした。それでも半年間は例会に出席してお酒を飲まずに過ごしました。私は「半年も酒を止めとったんじゃけん、もう一人で断酒ができる」と思い、女房に断酒会に行かないことを告げました。

断酒会に行かなくなって一、二ヶ月が経ったころ、「ちょっとぐらいええじゃろう」と思い、一杯の焼酎を飲みました。最初は、週に二杯か、三杯のペースでしか飲みませんでしたが、だんだんと酒量が増え毎日お酒を飲むようになりました。

その頃の私には、まとまった額のお金を持たせてもらえず、毎日タバコ代とコーヒー代の五百円を持たせてもらい、その中から貯めたお金で焼酎を買うようにしていました。表面上はお酒を飲まないことになっていた私は、また「隠し酒」「隠れ酒」を繰り返す様になったのです。

ある日、家にある梅酒を飲んだことを女房に見つかり、呉みどりヶ丘病院に連れて行かれ、通院が始まりました。それと同時に呉みどり断酒会に入会し、会長にバッチを付けていただきました。私は「確かに酒は飲んだけど、前みたいに大量に飲んじゃおらんのに、何で病院や断酒会に連れて行かれんにゃいかんのじゃろ」と思いながらも、しぶしぶ例会に出席していました。

それからの私は、家の中にはお酒を隠しておけないので、車のトランクのタイヤハウスに焼酎のパックを隠していました。また、家中の小銭をかき集めたり、「会社の同僚の親が亡くなった」と嘘を言ってはお金をもらったり、女房の財布からお金を抜き取ったりして、焼酎を買っては飲んでいました。そんな飲み方をしていたので罪悪感は有りました。

飲んだ後は「また飲んでしもうた」「明日からはもう飲まんぞ」と思うのですが、次の日の夕方になるとお酒が欲しくなってきて、「どうやって飲んじゃろうか」「どうすりゃ酒が手に入るじゃろうか」と言うことばかり考えていました。

ゴールデンウィークに入った去年の四月二十七日のことでした。その日は会社の同僚と、夜イカを釣りに行く約束をしていました。私は、いつも通り朝のウォーキングに行き、車に隠してあった紙パックの焼酎をワンカップ二本に移し、「今飲んでも、昼寝すりゃ夜には釣りに行ける」と思い、飲みながら歩いていました。そのときブラックアウトに落ち、気が付いたら病院に担ぎ込まれていたのでした。

後から女房に聞いた話ですが、**私は池のほとりの道端で、手足から血を流して倒れていた所を、近所の人が女房に連絡してくれて、家に連れ帰ったそうです。家に連れ帰った私を女房は病院に連れて行くために、車に乗せようとしたのですが、なかなか云う事を聞かない私は、まるで小さい子供がおもちゃを買ってもらえないときに良くやる、地べたに横になって手足をバタ付かせて、「病院には行かん。釣りに行くんじゃ」と言って駄々をこねていたそうです。**結局四〇分以上かかって車に乗せられ、呉みどりヶ丘病院に連れて来られた私は、即、入院ということ

になりました。後からこのことを聞いたとき、恥ずかしくて穴があったら入りたい気持ちでした。また、近所の人にも見られていたと思うと、情けなくて仕方がありません。

入院して一ヶ月ぐらい経ったある日、女房は、インターネットで調べた「アルコール依存症とは何か」「アルコール依存症と付き合うために」と言う内容を印刷した物を持って来てくれました。私はその印刷物を読み、「目からうろこが落ちたとはこう云う事を言うんだ」と思いました。そこには、アルコール依存症の症状や、原因、対処方法などが書かれていました。

私はそれまで、自分がアルコール依存症と診断されていたことを認めようとしていませんでした。「自分はアル中じゃない。ちょっと人よりようけお酒を飲む呑み助じゃ」と言う考えでした。

しかし、その印刷物に書いてある内容を読むと、自分にぴったりと当てはまることばかりが書かれていました。**「自分はアルコール依存症じゃったんじゃ。アルコール依存症なら酒を飲んじゃいけんじゃん」と気づきました。また、女房は私が入院した時の事を「胸に大きな穴が開いて、風が通り抜けるような感じだった」と言っていたことを思い出して、本心で「ごめん」と言いました。**

それからの私は、他の方の体験談を真剣に聞けるようになり、迷惑を掛けた家族や会社の事、様々な酒害による、非人間的な考え方や行動など色々なことに気づかされています。

現在、退院をして約十ヶ月が経ちました。退院と同時に再び呉みどり断酒会に繋がらせていただき週2回の例会や、色々なセミナーや大会に出席させていただいています。その中で、過去の過ちを振り返り、反省し、今まで人のことを何も考えていなかった自分を改めて、二度と周りの人に迷惑を掛けないようにしたいと思います。

これからも例会出席して、一日断酒でがんばって行きます。

本日は、第四十回広島県断酒（黒瀬）大会の場において、発表の機会を与えて頂きまして、ありがとうございました。

寄付者御芳名

（三月～七月度）

呉市　匿　名　様　六、五四九円
三原断酒友の会様　一〇、〇〇〇円
呉　大下美恵様　五、〇〇〇円
呉　堂　脇　様　五、〇〇〇円
呉みどりヶ丘病院院長
長尾澄雄様　六〇、〇〇〇円
感謝箱（三月～七月）
一〇、二九三円

新入会員紹介

◉呉市中央二丁目三―二十七―六〇四　**片山　久人**
◉呉市警固屋四―十三―二十一　**高木　宗弘**
◉呉市広横路二―二十九―三十　**北舛　武康**
◉呉市川尻町森二―十二―二十五　**原本　正文**
◉呉市両城一―七―十五　**中村　里美**
◉呉市西中央四―一―十八　**高井　行雄**

断酒継続おめでとう

☆一年　**堂脇　正美**　5月16日
☆一年　**熊野　克幸**　7月18日
☆三年　**新谷　美恵**　6月2日
☆四年　**松田　輝義**　4月1日

行事予定

○**10月3日**　第47回全国（和歌山）大会（和歌山ビッグホエール）
○**10月17日**　呉みどりヶ丘病院創立40周年記念
○**10月23～24日**　中国ブロックセミナー（岡山県）
○**11月20～21日**　第15回ふくやま一泊研修会（みろくの里）
○**11月6～7日**　第28回山口県合同合宿（山口県セミナーパーク）
○**12月8日**　第44回酒なし忘年感謝会（シティプラザ　スギヤ）

平成22年3月～7月度例会動員数

行事名	回	正会員	家族会員	賛助会員	他会会員	院内会員	ケアーセンター	合計
土曜例会	22	726	253	134	1,374	1,600	242	4,329
水曜例会	21	715	297		18			1,030
ブロック例会	5	75	29					104
新会員を囲んで	5	57	14					71
家族の集い	5		40					40
懇談会	5	10						10
特別院内例会	5	109	39					148
第45回中国断酒ブロック（米子）大会	1	25	11					36
第45回中国断酒ブロック（高知）大会	1	7	4					11
第66回松村断酒学校	1	3	3					6
第16回山口県断酒セミナー	1	5	3					8
第40回広島県断酒大会（黒瀬）	1	40	16					56
全断連総会（東京）	1	1						1
第9回鳥取県断酒一泊研修会	1	5	4					9
県連理事会	5	21						21
呉みどり断酒会役員会	5	34						34
合計	85	1,833	713	134	1,392	1,600	242	5,914